

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No.25 2021*

異文化における価値観に焦点を当てた  
「総合的な学習の時間の指導法」  
—実践報告—

川島 浩勝

A Practical Report: Teaching Integrated Studies Classes  
Focusing upon Cross-Cultural Values

KAWASHIMA Hirokatsu

長崎外大論叢

第25号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2021年12月

## 【研究ノート】

異文化における価値観に焦点を当てた  
「総合的な学習の時間の指導法」  
—実践報告—

川島 浩勝

A Practical Report: Teaching Integrated Studies Classes  
Focusing upon Cross-Cultural Values

KAWASHIMA Hirokatsu

## Abstract / Short Outline (概要)

This research note gives an overview of lectures for teaching integrated studies classes which focus upon cross-cultural values. It describes how such classes were conducted, in which the students were required to make a teaching plan based upon cross-cultural values. It has been found that cross-cultural values are something abstract and often “invisible”, and that the students are not familiar with them enough to make a good teaching plan employing them.

## キーワード

総合的な学習の時間、異文化理解、価値観

## 1. 研究背景

教育職員免許法施行規則の変更（平成29年11月）に伴い、教職課程に「総合的な学習の時間及び特別活動の指導法」の科目が新設された。「総合的な学習の時間」の目標の一つとして「自己の生き方を考える」があるが、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』（p.12、下線部は筆者：学びと生き方の関係を強調）には次のような記述がある。

自己の生き方を考えていくことは、次の三つで考えることができる。一つは、人や社会、自然との関わりにおいて、自らの生活や行動について考えていくことである。社会や自然の一員として、何をすべきか、どのようにすべきかなどを考えることである。二つは、自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えていくことである。取り組んだ学習活動を通して自分の考えや意見を深めることであり、また、学習の有用感を味わうなど学ぶことの意味を自覚することである。そして、これら二つを生かしながら、学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考えることが、三つ目である。学習の成果から達成感や自信をもち、自分のよさや可能性に気付き、自分の人生や将来、職業について考えていくことである。

特に下線部で示されているように、「自己の生き方を考える」というコンテキストを考えると、異

文化理解や国際理解といったテーマは、ある意味で当たり前の事となっている自国文化を超えたところで学習者に新しい物の捉え方・見方を提供し、「生き方」に大きな影響を与える可能性（日本人に顕著である集団主義的な生き方より欧米人に顕著である個人主義的な生き方を選択する等）もあるので、「総合的な学習の時間」において重要な役割を果たすものと考えられる。特に、異文化における価値観に関する学習はその効果が大きいと思われる。

遠藤（1994, p.100）は異文化の価値観を扱う教材や指導に関して、「英語圏の人々の表面に表れた風俗や生活習慣を知るための教材は、比較的豊富であり、その扱い方も特にむずかしいことはない。これに対して、表面に表れたものの根底にあってそれを規制している考え方や価値観は、それに劣らず重要であるが、学習者に理解させることは必ずしも容易ではない」と述べている。異文化の価値観を扱う教材や指導に関して川島（2019, pp.70-71）では、次のような見解が示されている。

「異文化における様々な価値観を理解する柔軟な態度の育成」が進めば、誤解を少なくし、人種的な偏見を無くすことに繋がると思われる。「異文化情報」における異文化の価値観に基づいて「総合的な学習の時間」を実践（少なくとも目標として）することは極めて重要であろう。

本研究ノートでは、異文化における価値観にフォーカスを当てた授業実践のあり方を考察した講義内容及びその成果物（学習指導案）について省察を加え、今後の課題を明らかにする。なお、授業実践の記録・データ等の使用に関しては、第1回目の講義で口頭及び文書で趣旨説明（教育改善が目的）を行い、すべての受講者より事前の許可を得た。

## 2. 講義内容（概要）

講義の概要は下記の通りで、1）基礎的情報、2）授業内容、3）授業の成果物（学習指導案）とその分析・評価に沿って情報を整理する。

### 2.1 基礎的情報

講義に関する基礎的情報は下記の通りである。

#### 2.1.1 目的

異文化における価値観がもつ役割・意義を理解し、価値観に焦点を当てた授業実践の指導案を作成することができる。

#### 2.1.2 受講者

4年制大学において教職課程を履修している学生で、全部で20名（男子学生7名、女子学生13名）が受講した。

#### 2.1.3 時期・回数

講義が実施された時期は2021年4月～5月で、1回90分の講義を5回行った。

#### 2.1.4 使用資料

固定したテキストは使用せず、下記のプリント教材及びインターネット上の視聴覚教材を用いた。

##### プリント教材

- 1) 「小・中・高における英語指導の実践事例」(水澤 2000)
- 2) 「総合的な学習の時間の目標」(野口 2018)
- 3) 「多文化共生への一歩！—ラップで心の距離を縮めよう— (小学校6年生)」(三田 2018)
- 4) 「<sup>22</sup> 謙遜—自己(身内)を卑下する」(西田ひろ子 1989)

##### インターネット上の視聴覚教材

- 1) 「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」(文部科学省)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128\\_mxt\\_kouhou02\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_01.pdf) : 2021年4月5日 アクセス
- 2) 「2020年度、子供の学びが進化！！よくわかる“新学習指導要領”」(文部科学省)  
<https://nettv.gov-online.go.jp/prg/prg18688.html> : 2021年4月5日 アクセス
- 3) 「総合的な学習の時間の改訂のポイント：新学習指導要領編 No.26」(独立行政法人教職員支援機構)  
<https://www.nits.go.jp/materials/youryou/026.html> : 2021年4月5日 アクセス
- 4) 「17年度鶴小5年 総合異文化国際理解教育」  
<https://www.youtube.com/watch?v=86LOfwNNExc&t=1s> : 2021年4月5日 アクセス
- 5) 「6年生 異文化・国際理解・英語」  
<https://www.youtube.com/watch?v=t5feGNFcnRU> : 2021年4月5日 アクセス
- 6) 「外国人はほめられたときに本当に謙遜しないのか?」(NHK Eテレ: 知りたガールとボーイ)  
[https://www.nhk.or.jp/eigo/girl-boy/?das\\_id=D0005140332\\_00000](https://www.nhk.or.jp/eigo/girl-boy/?das_id=D0005140332_00000) : 2021年4月5日 アクセス

なお、プリント教材の3)、インターネット上の視聴覚教材4)、5)は小学生を対象としたものであるが、国際理解や異文化理解といったコンテキストにおいて、特に、中学校レベルでの「総合的な学習の時間」でも使えるアイデアが紹介されていること、また、小学校・中学校・高等学校間の教育的連携の立場から「総合的な学習の時間」を考える情報を提供することができること等を考え、本講義で使用した。

## 2.2 授業内容

実施した5回の授業は、1) 総合的な学習の時間の意義の確認・理解、2) 異文化情報全般に対する意識の深化、3) 異文化における価値観の教育的扱いの重要性に対する理解、4) 異文化における価値観にフォーカスを当てた授業の指導案の作成、の4つの段階にわけることができる。各段階での講義内容や活動のポイントを纏めると下記のようなになる。

### 2.2.1 総合的な学習の時間の意義の確認・理解

受講者は、小学校・中学校・高等学校において「総合的な学習の時間」の授業を受けており、細部

の記憶は薄れているものの、授業に対する印象等は言えるものと思われる。ここでは、グループ形式で、過去を振り返り、どのような活動をしたかを話し合い、その内容を発表した。その結果、多くの受講者にとって「総合的な学習の時間」の印象は薄く、「先生が指定したテーマに関してクラスメートと話し合いをして発表した」とか「その時間は、学校行事の時間に当てられていた」などのような消極的回答が目立ったが、「総合的な学習の時間」について実態調査を行った大野(2004)や久我(2017)の調査結果を裏付けるものとなっている。

このような状況を踏まえ、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」や「総合的な学習の時間の改訂のポイント：新学習指導要領編 No.26」の教育用動画を見て、「総合的な学習の時間」の意義を確認した。講義では、それぞれの教育用動画に関して、コメントを書かせた。「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」に関しては、例えば、指導者の一方的解説で授業を終わらせるのではなく、新しい考え方などを生み出すきっかけになるような生徒同士のディスカッションの時間を増やし、学習者中心の授業を展開する必要性を述べるコメントがあった。また、「総合的な学習の時間の改訂のポイント：新学習指導要領編 No.26」に関しては、例えば、学びの質が重要で、各教科で身につけた資質・能力を「総合的な学習の時間」で総合的に活用することにより、思考力・判断力などが大いに伸びる、といったことを指摘するコメントがあった。

教育用動画に関するコメントから判断すると、確かに、受講者が過去に受けた「総合的な学習の時間」の印象は薄かったものの、「総合的な学習の時間」の意義を理解することは決して難しいものではなく、「総合的な学習の時間」に対する理解を深めることができたのではないだろうか。

## 2.2.2 異文化情報全般に対する意識の深化

講義中の机間指導等により受講者が外国文化（食文化や音楽文化等）に興味を持っていることはわかったが、異文化に関する書籍に触れることはあまりなかったようである。まず、異文化情報全般に関する知識を増やし、また、異文化情報に対する意識を深化させるために図書館にある異文化に関する複数の書籍を読み、異文化情報に関する情報交換を行わせた。

異文化理解教育が対象とする文化的要素のたまかな定義方法として「目に見える外面的文化要素」と「目に見えない内面的文化要素」（瀬田 2007, pp.131-132）を挙げることができる。「目に見えない内面的文化要素」は異文化情報全般に対する学習者の意識の深化を図るのに重要な役割を果たすと思われる。講義では、「目に見えない内面的文化要素」に目を向ける重要性を述べながら、これまでの異文化経験で、驚いたり、感動し、結果として物事に対する考え方が変化したり、また、新しい物の考え方が身につく、人生が豊かになったと感じたこと等を書く課題を出した。

口頭発表等の内容から判断すると、「目に見えない内面的文化要素」として位置付けられる外国人のフレンドリーな言葉遣いなどに関して、自己の価値観の変化を述べていた受講生はいたが、概して、異文化に関する情報の影響が表面的レベル（「〇〇は良いと思った。」等）に留まっているように思えた。ただ、自己の価値観の変化を述べていた受講生の話を聞くことにより、異文化情報全般に対する意識を深化させるきっかけにはなったのではないだろうか。

## 2.2.3 異文化における価値観の教育的扱いの重要性に対する理解

「目に見えない内面的文化要素」として価値観の違いや捉え方がある。異文化における価値観の教

育的扱いの重要性に対する理解を深めるための教材は多数あるが、英米文化と日本文化の視点から価値観の違いや捉え方を深く考えさせるのに適していると思われる西田（1989）とNHK教育動画（上述の「インターネット上の視聴覚教材6」）を使いながら日本の「謙遜文化」について考察を行なった。

西田（1989, pp.154-160）は、日本人とアメリカ人の対話の中に日本人の「謙遜文化」をトピックとして扱い、日本人とアメリカ人の言動に対して日本人・アメリカ人双方がどのように捉えているかを研究したものであるが、先ず、対話文（下線部は筆者で、日本的な謙遜文化の影響があると思われる表現を強調）を見てみよう。

②謙遜-自己（身内）を卑下する

<日本で>

ホワイト夫人は夫と一緒に日本にやって来た。夫妻は一週間日本に滞在する。ホワイト氏は数回仕事の打ち合わせがあるが、夫人はまったく予定がない。そこでホワイト氏が永野氏に「妻をショッピングに連れていってくれるように、あなたの奥さんをお願いしてもらえないか」と頼んだところ、快く引き受けてくれた。今、ホワイト夫人は永野夫人と話をしている。二人は初対面である。

Mrs. White: Thank you very much for coming with me for shopping.  
(私の買い物に付き合ってくださいましてありがとうございます。)

Mrs. Nagano: Oh, not at all.  
(どういたしまして。)

Mrs. White: I really appreciate that you spend so much precious time on me.  
(大切な時間を私のために使ってくださって感謝しています。)

Mrs. Nagano: Don't mention it. I usually play around at home.  
(そんなことおっしゃらないでください。私はいつも家でぶらぶらしていますから。)

Mrs. White: Pardon me? Did you say that you play at home?  
(えっ、なんとおっしゃいました？ 家で遊んでいるっておっしゃいましたか?)

Mrs. Nagano: Yes.  
(はい。)

Mrs. White: How many children do you have?  
(お子さんは何人ですか?)

Mrs. Nagano: I have two. One is seven and the other is five. Both are not well raised that they're troublemakers.  
(二人です。一人は7歳でもう一人は5歳です。二人ともしつけがなっていないものですから手を焼いています。)

Mrs. White: Oh?  
(そうですか。)

概して、アメリカ社会には、自分自身や身内の者を卑下するという社会的ルールはないため、この対話文の下線部の発言のベースとなる日本の伝統的価値観は理解されない。本資料では、例えば、「なぜ親が子供のことを悪く言うのか、またしつけをしないのは親の責任であるのに、なぜ自分の非を初

対面の人に話すのか、といったように、親の人間性の問題にまで非難の矛先が向けられる危険性もある」というような分析もなされているが、対話文を読み込み、分析結果を考察することにより日本とアメリカの価値観の違いに対する理解を深めることができると思われる。

NHK教育動画「外国人はほめられたときに本当に謙遜しないのか?」は、登場する外国人が着用している服装等を褒め、その反応を編集した番組である。番組ではイギリス人男性が謙遜する場面が収録されているが、謙遜という日本の価値観が理解されにくいアメリカ社会がある一方、イギリスの社会には日本の謙遜文化に似た社会的風土があるという情報が提供されている。同じ欧米系でも価値観の違いがあることを考える機会になったのではないだろうか。

なお、まとめ及び発展的課題として「謙遜文化」に基づく価値観の違いを考える視点として、次のようなことに留意するように指導を行った。

- 1) 日本人としての「私」と「謙遜文化」
- 2) アメリカ人と日本人：相違点、共通点
- 3) 自国・外国の人をみる視点：寛大性
- 4) 言葉（文化）の違い：日本語と英語
- 5) 文化的ファクターと個人的ファクター
- 6) TPOのファクター

#### 2.2.4 異文化における価値観にフォーカスを当てた授業の指導案の作成

異文化における価値観にフォーカスを当てた授業の指導案の作成にあたり、先ず、1) どのような価値観を扱うか（背景、課題設定、指導計画）、2) 学習過程の流れはどのようになるか（教科横断性、深い学びへの誘導の仕組み、教室での各活動）などの基礎的要素の確認を行った。次に、「17年度鶴小5年 総合異文化国際理解教育」や「6年生 異文化・国際理解・英語」など「総合的な時間の指導法」に関連する教育用動画を見て、授業を充実させる活動内容（1. 動画資料：検索・作成、2. インタビュー：活動・発表、3. ゲストスピーカー：交渉、段取り等、4. インターネット：オンライン交流、5. 日本文化：資料集め、発表）を整理した。

更に、下記のような授業の流れを簡素化し、上述における学習事項の全体像が掴みやすいようにした。

極点な例として

- 1) E テレの番組（英国人が謙遜する場面）を生徒に見せる。
- 2) 1) を見た生徒は、英国人の言動（価値観）に興味・関心を持つ。
- 3) 生徒は英国人に興味を持ち、日本人や自分の行動様式を考えるようになった。

実際に用いた指導案は、1) 日時、2) 校種・学年、3) テーマ、4) 目的（3つ）、5) テーマ設定の背景・理由、6) 想定される生徒の変容・変化（3つ）、7) 指導計画（全体を3回で実施し、第3回を本時とする）、8) 本時の活動（時間・活動の流れ、支援・提示教材、生徒の反応、留意点）、9) 学習成果の評価方法、10) 使用教材（最低5つ）、から構成されている。

### 3. 作成された指導案に対する分析：「価値観」という言葉に焦点を当てて

受講者は、上述の講義内容を踏まえ「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」ことにフォーカスを当てた授業の指導案の作成を行った。異文化指導という観点から見ると「総合的学習の時間の指導」に使用できるアイデア（日本人と外国人の食事におけるマナーの違い、等）が満載されていた。しかしながら、「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」という観点で見ると、上記2.3.4の「1）どのような価値観を扱うか（背景、課題設定、指導計画）」が明確でない指導案が多々あり、指導案作成の目的が十分に理解されていなかったものと思われる（理解していたとしても、作成の過程で結果的にそうなった可能性もある）。

指導案を分析する観点の一つとして言葉の使い方を挙げることができる。例えば、「目的」・「テーマ設定の背景・理由」や「想定される生徒の変容・変化」・「学習成果の評価法」で使われている「価値観」という語は、「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」というコンテキストを考えると、「ナビゲーター的役割」を果たし、指導案の授業の方向性・計画性を示すものと考えられる。ここでは、一つの試みとして、「価値観」という言葉の使用に焦点を絞り、作成された指導案におけるその使用状況を調べた。その結果を纏めると次のようになる。

#### 作成指導案における「価値観」という言葉の使用状況

指導案の項目	件数（全体数：20）
「目的」・「テーマ設定の背景・理由」	7
「想定される生徒の変容・変化」・「学習成果の評価法」	3

この表から、指導案において「価値観」という言葉の使用頻度が低いことがわかる。無論、「価値観」という言葉が全てではなく、頻繁に使用されなければならないものではないが、「価値観」という言葉が的確に使われている指導案では、「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」という趣旨が的確に理解されている傾向にあり、例えば、集団主義的な考えに基づく日本的価値観と個人主義的な考えに基づくアメリカ人的価値観の違いを題材にしたものがあった。逆に、「価値観」という言葉が殆ど使用されていない指導案では、例えば、日本と外国の食文化の表面的違いだけにフォーカスが当てられ、「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」に至っていないケースが散見された。

このことは価値観にフォーカスを当てた授業の趣旨を的確に理解し、指導案を立てることの難しさを示しているのかもしれない。指導案の数が20ということを考えれば、「目的」・「テーマ設定の背景・理由」や「想定される生徒の変容・変化」・「学習成果の評価法」における「価値観」という言葉の使用件数（7件と3件）はかなり低い。上述の講義内容は理解していたものの、実際に指導案を書くことになると、価値観にフォーカスを当てた授業を行うという考えが希薄になったのだろう。また、たとえ「目的」・「テーマ設定の背景・理由」において「価値観」という言葉が使われていても、指導案を作成するうちに、その方向性が失われ、「想定される生徒の変容・変化」・「学習成果の評価法」において「価値観」という言葉の使用件数が半分以下になり（7件から3件へ）、結果として「異文化における価値観の捉え方の違いを考えさせる」という目的が達成できなくなったと思われる。

### 4. 問題点の整理と今後の課題

本研究ノートでは、異文化における価値観にフォーカスを当てた授業実践のあり方を考察した講義

内容をまとめ、その成果物としての指導案に省察を加えた。先に述べたように、受講者の多くは異文化に対する興味関心が高かったが、抽象的で、目に見えない「価値観」をテーマにして指導案を作ることの難しさが浮き彫りとなった。

目的を達成できなかった理由を指導面から挙げるとすれば、次のようになるであろう。

- 1) 異文化における価値観の違いや捉え方に関して事例紹介が十分ではなかった。価値観の違いや捉え方を学習する意義等が深いレベルで認識されていなかったのかもしれない。
- 2) 指導案作成の途中で、受講者が取り上げたテーマに関するフィードバック（学生、指導教員）の時間が不足していた。

全体で5回の講義で、時間的制約があるため難しい面はあるが、今後は受講者の異文化における価値観の問題への理解を深めさせ、また、指導体制の充実を図り、より良き指導案作成に結びつけていきたい。

### 【参考文献】

- 遠藤栄一 (1994). 「異文化理解のための教材論」(第2章「英語教育教材論」・第3節) 片山嘉雄・遠藤栄一・佐々木昭・松村幹男 (編) 『新・英語科教育の研究《改訂版》』大修館書店, 98-105.
- 大野順子 (2004). 「『総合的な学習の時間』の実態調査を踏まえて：大阪府和泉市公立小学校・中学校における『総合的な学習の時間』の実施状況についての考察」『桃山学院大学総合研究所紀要』, 30(2), 143-176.
- 川島浩勝 (2019). 「『総合的な学習の時間の指導法』における異文化教材の扱い—関連研究の整理—」『長崎外大論叢』, 23, 65-79.
- 久我周夫 (2017). 「『総合的な学習の時間』の課題と改善についての検討—授業を受けてきた側の調査から見えてきたもの—」『大阪夕陽丘学園短期大学』, 60, 23-35.
- 瀬田幸人 (2007). 「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」『岡山大学教育学部研究集録』, 134, 129-139.
- 野口徹 (2018). 「総合的な学習の時間の目標」(I. 理論編 ③) 村川雅弘他 (編) 『総合的な学習の時間の指導法 [教職課程コアカリキュラム対応 大学用テキスト 理論と実践の融合]』日本文教出版, 20-23.
- 西田ひろ子 (1989). 「② 謙遜—自己(身内)を卑下する」『実例で見る 日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店, 154-160.
- 水澤裕子 (2000). 「小・中・高における英語指導の実践事例」荒木秀二・後藤英照 (編) 『小・中・高を結ぶ英語教育と総合的な学習』三省堂, 121-132.
- 三田大樹 (2018). 「多文化共生への一歩！—ラップで心の距離を縮めよう— (小学校6年生)」(I. 事例編 ⑩) 村川雅弘他 (編) 『総合的な学習の時間の指導法 [教職課程コアカリキュラム対応 大学用テキスト 理論と実践の融合]』日本文教出版, 144-149.